



しつげん 湿原はどうやってできるの

たん うえ しつげん でい炭の上にはできる湿原

日本には、湿原がたくさんあります。特に有名なのは、北海道の釧路湿原・サロベツ原野、本州の尾瀬ヶ原・霧ヶ峰などです。これらの湿原は、湖・沼・川の水辺や、まわりより低いために水はけが悪い低湿地に、でい炭（ピート）が積み重なり、その上に植物が密集して生えて、できたものです。でい炭とは、死んだ植物が、分解されずに積み重なったものです。北海道の山地・平地や、本州の中部地方から北の山地のように、気温が低い所では、植物が死んでも、あまり分解されずに、でい炭になることが多いのです。

そうげん しつげん 草原から湿原へ

湖・沼・川などの水辺や、低湿地には、いろいろな植物が生えて、草原のようになることがあります（沼沢草原）。それらの植物からでい炭ができ、その上に、ヨシや、大形のスゲ類などが、密集して生えると、湿原（低層湿原）ができたこととなります。

ひろ しつげん 広い湿原ができるまで

ヨシや、大形のスゲ類などのでい炭が積み重なってくると、その上に、又マガヤや、中形・小形のスゲ類が、密集して生えます（中間湿原）。さらに、又マガヤやスゲ類のでい炭が、厚く積み重なってくると、栄養分が少ない、地下水がとどきにくいなど、植物が育つための条件が、悪くなります。それでも育つのは、ミズゴケです。このミズゴケは、死んでも、ほとんど分解されないのので、ミズゴケのでい炭がどんどん積み重なると、小さいおかのようになり、盛り上がります。このようなミズゴケのおかが、ほかのおかとなつながっていき、ついには、広いミズゴケの湿原（高層湿原）となります。有名な広い湿原の多くは、このようにして、できたのです。（監修・青木 国夫）

